開 催 報 告

令和６年１２月１１日（水）、東京上野公園内にある国立科学博物館の日本館「講堂」（重要文化財）で、「自然と生きる」をテーマに第９回目となる「田園自然再生活動の集い」を対面とオンライン配信とのハイブリッド方式で開催しました。オンライン視聴も含め、田園自然再生活動に携わる活動団体や行政職員、農業関係者、大学関係者など２４０名を超える参加者が熱心に耳を傾けました。

1.　主　旨

地球での生命の誕生以来、生物は環境に依拠し、環境の変化に適応するため進化を続けてきました。長い進化の過程を経て狩猟採集生活を送っていた人類は、自然の操作である農耕による食料生産を始め、さらに大量の余剰農産物を蓄えることで、多くの人間が集まる文明社会を築き、その興廃を繰り返しながら、今日までの歴史を刻んできました。

今日でも人間の活動は、自然の一部として、食料や水の供給、気候の安定など、生物多様性を基盤とする生態系から得られる恵み（「生態系サービス」）によって支えられています。しかしながら、人間の過度な営みによる森林伐採、大規模開発、環境破壊、さらにそれらがもたらす大気汚染、水質汚濁、土壌や海洋の汚染などが、生態系サービスの基盤となる自然環境や生物多様性に大きな影響を及ぼすことも懸念されています。

加えて、近年では、暴風、豪雨、豪雪、洪水、地震などの人的被害を伴う自然災害が激甚化かつ頻発化して発生したり、野生鳥獣が人間の生活、生産の場に頻繁に出没するなど、「自然と生きる」上でのリスクが重大化、顕在化している側面もみられるようになりました。

そこで、今年度の田園自然再生活動の集いでは、「自然と生きる」をテーマに、自然資本から得られる恩恵を後世に渡って享受し続けるための農業等の営みの在り方や、自然災害や野生鳥獣によるリスクに対峙しつつ自然の中での営みや暮らしの在り方について改めて見つめ直し、これからの田園自然再生活動についてのヒントを探ります。

2.　開催概要

・開 催 日：　令和６年１２月１１日（水）　１３：００～１６：４５
・開催場所：　国立科学博物館　日本館「講堂」（対面・WEB配信併用）
　　（東京都台東区上野公園7－20　上野公園内）
・主　　催：　(一社)地域環境資源センター、田園自然再生活動協議会

・後　　援：　農林水産省、環境省
全国農村振興技術連盟、(公社)農業農村工学会
農村計画学会、棚田学会、(一財)日本グラウンドワーク協会

重要文化財にも指定されている
日本館の「講堂」

・参加人数：　２４３名
・プログラム：
(1)主催者挨拶　田園自然再生活動協議会 会長　中村 桂子
(2)来賓挨拶　農林水産省農村振興局整備部長　緒方 和之
環境省自然環境局自然環境計画課長　番匠 克二
(3)基調講演　〇荘林 幹太郎（総合地球環境学研究所 特任教授（プログラムディレクター））
題目「『私たち生きものの中のわたし』をどのように政策に反映させるか？
～昨年度の基調講演を踏まえての一政策研究者の反省～」
〇山端 直人（兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授）
題目「これからの地域社会のための野生動物と人の関係」
(4)パネルディスカッション
コーディネーター　荘林 幹太郎（総合地球環境学研究所 特任教授（プログラムディレクター））
コメンテーター　中村 桂子　（JT 生命誌研究館 名誉館長・田園自然再生活動協議会 会長）
山端 直人　（兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授）
林田 直樹　（地域環境資源センター 理事長）
パネリスト・活動発表
遠藤 圭二郎（照井土地改良区 工務課長兼換地課長）
「次世代へ繋ぐ一関遊水地の取組」
平峰 拓郎　（株式会社坪口農事未来研究所 取締役）
「コウノトリ育む農法の未来（環境配慮型農業から環境再生型農業へ）」
(5)情報交換会　国立科学博物館 日本館地下１階「多目的室」

3.　プログラム内容

■　開　会

田園自然再生活動協議会長の中村桂子より主催者代表挨拶、その後、農林水産省の緒方整備部長と環境省自然環境計画課の番匠課長（※代読）からもご挨拶をいただきました。緒方整備部長からは、持続可能な農林水産業の維持・発展のためには生物多様性の保全と環境との調和を図ることが不可欠であるとのお話しがありました。また、みどりの食料システム戦略に係る取組や食料・農業・農村基本法の基本理念など農水省で取り組まれている各種政策のほか、土地改良事業における環境との調和に配慮した基盤整備の実施や多面的機能支払交付金など地域が協働で行う生態系保全の取組に対する支援についてもご紹介をいただきました。さらに、番匠自然環境計画課長(※代読)からは、2030 年までに生物多様性の損失を食い止め、回復軌道にのせる（ネイチャーポジティブ）という目標達成に向けて、自然共生サイトの認定や生物多様性増進活動促進法の制定など、環境省が進めている政策や取組についてお話しをいただきました。

田園自然再生活動協議会
会長 中村 桂子 氏

農林水産省農村振興局
整備部長 緒方 和之 氏

環境省自然環境局
自然環境計画課長 番匠 克二 氏
（里地里山保全専門官 蒲地 紀幸 氏 代読）

■ 講　演

「『私たち生きものの中のわたし』をどのように政策に反映させるか？
～昨年度の基調講演を踏まえての一政策研究者の反省～」
総合地球環境学研究所 特任教授（プログラムディレクター）　荘林 幹太郎 氏

荘林氏は兵庫県のご出身。農業政策、農業貿易と環境、農業環境・資源政策がご専門で、世界の農業環境政策をテーマに研究、講演活動をされています。

今回荘林氏は、昨年講演いただいた中村桂子氏の「私たち生きものの中のわたし」に深く感銘を受けられ、これまでの農業環境政策を「上から目線」だったのではないかという視点で、ご自身の経験と政策の枠組みを関連付けながらご講演いただきました。

主に「農業の多面的機能を巡る政策」と「農業と環境の関係性を改善する農業環境政策」について、国内外の動向を踏まえながらご紹介いただきました。農業生産を継続しながら生物多様性を維持してきた日本特有の自然との関わりの中で、滋賀県や兵庫県豊岡市などの世界的にもユニークな取組を例としてあげながら、「中から目線」の農業環境政策の重要性と今後の可能性についてご示唆いただきました。

総合地球環境学研究所
特任教授
（プログラムディレクター）
荘林 幹太郎 氏

■ 講　演

「これからの地域社会のための野生動物と人の関係」
兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授　　山端 直人 氏

山端氏は三重県のご出身。ご専門は農村計画学、野生動物の被害管理で、地域政策や農村計画の研究を基礎に、獣害を軽減できる社会モデルの育成や、地域が主体的に獣害対策を持続できる仕組みづくりを研究されています。

今回は「これからの地域社会のための野生動物と人の関係」として、参加型アクションリサーチの手法を用いた現場実証により、獣害という社会課題を解決していくプロセスや最前線の集落での取組についてご講演いただきました。

野生動物管理や獣害対策は「公助（行政）」「共助（集落・地域）」「自助（農地）」とそれぞれの主体が十分に役割を果たし協力していくことが重要で、とりわけ集落や地域主体で取り組むことで効果が発揮されると、現場実証を基に「地域政策」の観点からお話しいただきました。今回ご紹介いただいた集落や地域主体による問題解決のプロセス・手法は、野生動物や獣害の問題だけではなく、今後の地域農業や地域社会に関わるさまざまな問題解決に大いに役立つと考えられ、田園自然再生活動を展開していく上での貴重なヒントをいただきました。

兵庫県立大学
自然・環境科学研究所
教授 **山端 直人 氏**

■ パネルディスカッション

２組のパネリストに各地域での活動をご紹介いただいた後、総合地球環境学研究所の荘林特任教授をコーディネーターとして、中村会長、山端教授、林田理事長の３名のコメンテーターとの６名でディスカッションが行われました。

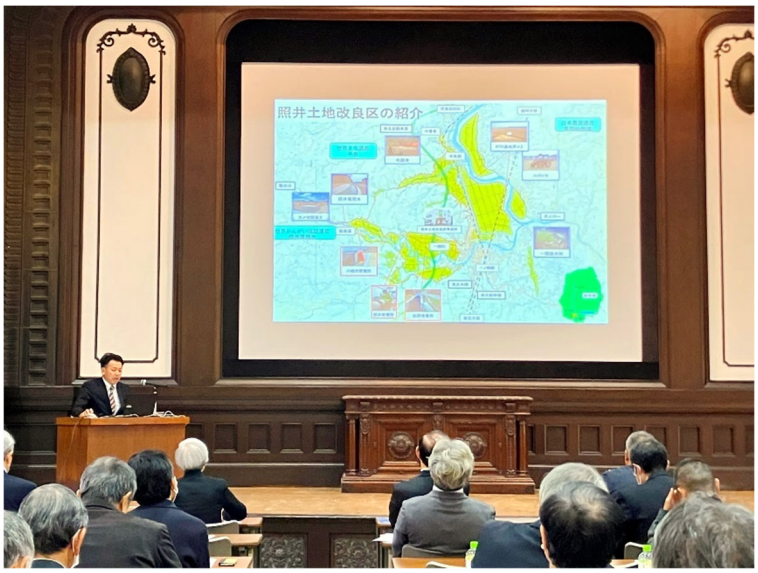
【活動発表①】『次世代へ繋ぐ一関遊水地の取組』

照井土地改良区　　遠藤 圭二郎 氏

岩手県一関市の一関遊水地での活動報告。

農地利用としては日本一の一関遊水地の紹介とともに、洪水被害軽減のための苦労や対策、そこで取組まれている環境保全活動や大区画ほ場を活かしたスマート農業についてご紹介いただきました。発表の冒頭では、農業と人生の師と仰ぐお祖母様への感謝の気持ちを述べられました。後継者不足や厳しい土地条件と対峙しながらも、地域一体となってその土地ならではの工夫と先進技術を取り入れながら、営農を続け、代々受け継がれてきた農業や自然環境を次世代へ繋げていきたいという力強いメッセージをいただきました。

照井土地改良区
遠藤 圭二郎 氏



【活動発表②】『コウノトリ育む農法の未来（環境配慮型農業から環境再生型農業へ）』
株式会社坪口農事未来研究所　平峰 拓郎 氏

兵庫県豊岡市の三宅地区での活動報告。

豊岡市で進められているコウノトリ野生復帰プロジェクトの「コウノトリ育む農法」について発表いただきました。これまでの「コウノトリ育む農法」はお米作りと生物多様性に主眼を置いていましたが、これからは更に環境負荷軽減にも目を向ける必要があるのではないかという視点で、その対象ポイントと実践されている対策ポイントについてご紹介いただきました。従来農法に比べ、環境負荷を減らす新しい「環境再生型農業」を目指し、この農法を推進するための取組や生物多様性を担保するための検証を行いながら、自然環境の保全に有効であると実証できるような活動をこれからも進めていきたいと展望を述べられました。

（株）坪口農事未来研究所
平峰 拓郎 氏

【パネルディスカッション】

・コーディネーター：　荘林 幹太郎　（総合地球環境学研究所 特任教授（プログラムディレクター））
・コメンテーター　：　中村 桂子　（JT 生命誌研究館 名誉館長・田園自然再生活動協議会 会長）
　　山端 直人　（兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授）
　　林田 直樹　（地域環境資源センター 理事長）
・パネリスト：　遠藤 圭二郎　（照井土地改良区　工務課長兼換地課長）
　　平峰 拓郎　（株式会社坪口農事未来研究所 取締役）

パネルディスカッションは、総合地球環境学研究所の荘林特任教授をコーディネーターとして進められました。今回のテーマ「自然と生きる」という観点から、自然の中での営みや暮らしの在り方、そして農業の在り方について、それぞれの方々がご自身の経験も交えながら思いやお考えを語ってくださり、地域活動を継承・継続していくことの意義と今後の展開について議論が交わされました。

ディスカッションの中では「集落」と「サイエンス」をキーワードとして、自然の中で生きていく上での役割と重要性、双方の関係性についても活発に意見が交わされました。

山端氏からは「農業について、かつては不可能だと考えられていたことが今は実践されていることに驚き、感銘を受けた」、また、「自然の中で生きるための最小ユニットが集落で、すべてがここから始まり広がっていく最も重要なもの」であり、「サイエンスをテクノロジーと言葉を置き換えて考えるとすれば、集落の獣害対策では仲間同士のコミュニケーションツールとして SNS がとても活用されていて、サイエンスの地域社会に貢献できる余地はまだ十分にある」とコメントをいただきました。林田氏は「今回、集落とサイエンスの重要性が指摘されたことはとても大切なこと。集落を継続していくためには、そのメリットだけでなく、集落が持つしがらみのようなことにも配慮していく必要があるのではないか」、また「ともすれば悲観的な話題も多いサイエンスではあるが、今回のみなさんのお話しを伺って、更なる農村での活用に大いに期待したい」と述べました。中村氏からは「国内外の農業政策を考えてくださっている方々が『私たち生きもの

の中の私』を意識してくださることが、今の社会ではとても重要」である。サイエンスという言葉を受けて、理科の教科書の話題から、「地学と生物というサイエンスは、まだわからないことがたくさんあって、新しいことがどんどんわかって変わってきている。21 世紀においてみんなが暮らしやすい社会を作っていくためには、昔からの知恵や日常と繋がったかたちでサイエンスを活かすことがこれからはとても大切。それを具体的に実践すること、一番活かされることこそ『農業』であり、それを支えていくものがサイエンス。これを大切にしていく必要がある」とコメントをいただきました。

最後に荘林氏は「自然の中の何と向き合うのか、それぞれ対象も地域も違っていたが、自然の中で生きるということを一番実感できるのは、地域の中で自然と向き合っておられる「農業」に携わっている方々ではないか。今回はそれぞれが向き合っておられる最先端の状況について知ることができ、大きな発見があった。田園自然再生活動が新たなフレーズに入っていく萌芽を共有できたのではないか」と、田園自然再生活動の今後に熱い期待の言葉を寄せ、締め括られました。

荘林 幹太郎 氏

中村 桂子 氏

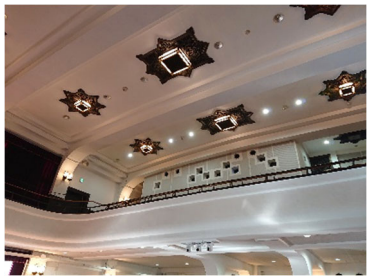
林田 直樹 氏

山端 直人 氏

遠藤 圭二郎 氏

平峰 拓郎 氏

■ **閉会**

閉会の挨拶　　林田 直樹　　（地域環境資源センター 理事長）

国立科学博物館　日本館「講堂」内の様子